



Title	いじめ問題と教師 : いじめ問題に関する調査研究 (Ⅱ)
Author(s)	秦, 政春
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1999, 25, p. 235-258
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9134
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

いじめ問題と教師—いじめ問題に関する調査研究(Ⅱ)—

秦 政 春

目 次

1. いじめと教師
2. いじめに対する教師の対応
3. いじめ問題に対する教師集団の協力体制
4. いじめの早期発見のための取り組み
5. いじめをおこさせないための取り組み
6. 教師—子ども関係といじめ
7. 教師の態度・行動といじめ
8. 教師の教育活動といじめ
9. 教師同士のいじめ
10. 教師同士のいじめと子どもたち

いじめ問題と教師—いじめ問題に関する調査研究(Ⅱ)—

秦 政春

1. いじめと教師

子どもたちのいじめと教師との関係という問題は、一般的なテーマにもかかわらず、これまであまり明らかにされてこなかった。たとえば、いじめに対して、現実には教師がどんな指導や対応をしているのか、あまりよくわからない。多くの場合、いじめに対する教師の指導や対応のありかたが話題になるのは、大きな「いじめ事件」が発覚したときくらいのものである。しかし、こんな場合であっても、なぜ教師はいじめに気づかなかったのかという議論に終始することが少なくない。

まして、直接的、間接的を問わず、あるいは意図的、無意図的を問わず、教師の言動や態度といったものが、子どもたちのいじめにいかなる影響をおよぼしているのかということについては、ほとんどわかっていない。いま、子どもたちのいじめは、その大半が学校のなかで生じており、しかもその舞台は教室が中心である¹⁾。そのことを考えても、いじめ問題に関して、教師が重要なキーパーソンであることは否定できない。

そこで、本小論では、子どもたちのいじめ問題に対して、「教師がいかに関わっているのか」ということを中心にして考察を進めていきたい。むろん、いじめ問題に対する「教師の関わり」と一言にいても、いくつかのレベルがある。これには、まず大きく分けて、つぎの2つがある。1つは、子どもたちのいじめに対して、教師がどんな対応や指導をしているのかという問題である。いま1つは、これとは逆に、教師の言動や態度のなかに、いじめを誘発してしまうような内容がふくまれているという問題である。

あえて指摘するまでもなく、この両者はまったく次元の異なるものである。前者は、いじめの解決にむけての、より「積極的」で「直接的」な指導ということになる。しかし、後者は、教師からみて「無意図的」であり、あくまでも結果論とはいえ、子どもたちに対するネガティブな影響を問題にしたものである。

とはいえ、この両者をまったく切り離して問題にすればよいというものでもない。いじめに対する対応や指導を、いくら積極的に子どもたちにしたとしても、日常的な教育活動のなかにいじめを誘発してしまうような内容がふくまれているとすれば、その効果はないに等しい。まして、子どもたちに対する教師の態度や行動のなかに、「いじめ」に類するようなものがあるとすれば、もはや指導以前、の問題である。

ここで、本小論の具体的な中身についてふれておきたい。さきほど述べたような2つ

のレベルのなかに、さらにいくつかの内容がある。前者のいじめに対する対応や指導に関しては、実際にいじめがおこったときに取った具体的な対応や指導の問題、そのときの教師集団の連携や協力体制に関する問題、そしてより日常的ないじめに対する指導の問題がある。

また、後者に関しては、教師のどんな言動や態度が子どもたちのいじめに結びついているのかという問題がある。そして、教師の教育活動のなかに、むろんそれを意図したわけではないにせよ、結果的にいじめを誘発してしまうようなものもある。これに加えて、教師集団にもいじめがあるという実態まである。また、こうした教師集団の人間関係に関する問題状況が、子どもたちのいじめに影響をおよぼしている可能性もある。

本小論では、以上のような内容から、いじめ問題に対する「教師の関わり」について明らかにしたい。なお、使用したデータは、以下のようなものである²⁾。教師に関しては、福岡県内の小・中学校教師を対象にして、1996(平成8)年8～9月に郵送法で実施した調査の結果による。サンプル数は小学校教師が423、中学校教師は344である。子どもに関しては、福岡県内の小・中・高校生を対象にして、1996(平成8)年10月～1997(平成9)年1月に実施した調査の結果による。サンプル数は小学生(5・6年生)が712、中学生(全学年)449、高校生(全学年)は1366である。

2. いじめに対する教師の対応

まず、いまのクラスで、どのくらいいじめが生じているのか、教師の回答をみておきたい。小学校教師によれば、よくある0.2%、ときどきある22.5%、あまりない36.4%、そしてまったくないという回答が33.3%である。中学校教師の場合は、順に4.4%、33.1%、35.5%、そして17.1%といった具合である。小・中学校教師の回答でみるかぎり、さすがによくあるという割合は少ないが、それでも子ども同士のいじめがかなりの頻度で生じていることはまちがいない。

とくに、まったくないという割合に注目してみると、小学校教師ではほぼ3割、中学校教師になるとわずかに2割程度でしかない。むろん、いじめと一言でいっても、中身がかなり多様であることは容易に想像できる。しかし、いじめがこれほど大きな問題になっているこの時代、しかも教師の判断ということを考えれば、たんなる悪ふざけをこえた「いじめ」が一定の割合で生じていることはまちがいない。

また、いじめのサインに関しては、あったという小学校教師は59.2%、なかったという割合が25.6%である。中学校教師になると、それぞれ68.5%と23.9%を数えている³⁾。そのサインに対して、すぐに気づいたという小学校教師は60.8%、あとで気づいた34.5%、気づかなかったという割合が1.4%である。中学校教師の場合は、順に62.8%、29.1%、そして1.7%である⁴⁾。この数値を単純に理解すれば、いじめがおこったとき6割から7割程度はいじめのサインを出していることになる。しかし、いっぽうでは2割か

ら3割ほどは、サインを出していないことになる。

なお、いま問題にしたいじめのサイン、以下の教師の具体的な行動、そしてそのいじめのいまの状態に関しては、その教師のクラスでおこったもっとも顕著ないじめ行為について回答してもらったものである。

つぎに、こうしたいじめに対して、教師が具体的に行った行動についてみておきたい。表2-1の結果が、これを示したものである。このなかで、左側が教師が取った対応、そして右側がそのうち最初にした対応である。左側のほうを中心にみていくと、パターンとしては、いじめられた子ども、ないしはいじめた子どもに対応したというものがもっとも多い。続いて、クラスみんなで話しあわせた、いじめられた子どもの家庭訪問、いじめた子どもの家庭訪問、そして当事者同士で話しあわせたといった順位で並んでいる。

表2-1 クラスでおこったいじめに対する教師の対応
(いじめがおこったことがあるという教師に限定) 単位: % (左側は M.A.)

対応	教師が取った対応 (M.A.)			最初にした対応		
	小学校教師	中学校教師	計	小学校教師	中学校教師	計
なにもしなかった	0.0	0.8	0.4	0.0	0.0	0.0
しばらく様子をみていた	21.2	17.1	19.2	4.4	4.0	4.2
いじめられた子どもに対応した	58.4	67.7	63.1	31.6	44.2	37.9
いじめた子どもに対応した	63.6	66.1	64.9	18.4	9.6	14.0
当事者同士で話しあわせた	28.4	29.5	28.9	4.8	0.4	2.6
クラスみんなで話しあわせた	45.6	40.2	42.9	5.2	4.4	4.8
いじめた子どもの家庭を訪問して、保護者と話しあった	22.8	33.5	28.1	2.8	1.6	2.2
いじめられた子どもの家庭を訪問して、保護者と話しあった	31.2	42.6	36.9	2.8	2.4	2.6
保護者同士で話しあわせた	4.0	8.4	6.2	0.4	0.0	0.2
全職員の問題として、職員会議で話しあった	14.8	22.3	18.6	0.4	0.0	0.2
ほかの機関(PTA、家裁、児相など)にゆだねた	1.6	1.2	1.4	0.0	0.0	0.0
その他	2.4	0.4	1.4	0.8	1.6	1.2
D.K., N.A.				28.4	31.9	30.1
計(N)	100.0(250)	100.0(251)	100.0(501)	100.0(250)	100.0(251)	100.0(501)

(注) 1、左側は、クラスでおこったいじめに対して、教師がどのような対応をしたのか示したもの(M.A.)。また、右側は、いちばん最初にした対応について示したもの。

2、いまのクラスでおこったもっとも顕著ないじめ行為について回答してもらったもの。

3、いまのクラスで、子ども同士のいじめがおこることが「まったくない」というサンプル、およびこれに関して無記入のサンプルは、集計から除外した。

全体的にみるかぎり、いじめに対して多くの教師はそれなりに対応しているという印象である。その意味では、まずまずの対応とも考えられる。しかし、むしろ問題はこれ以降にどんな対応をしたのかということが重要である。とくに、いじめ問題というのは、いわゆる「被害者」はある程度特定できるが、「加害者」については、だれを、そしてどこまでの範囲を指しているのかという、きわめてわかりづらい側面がある。

したがって、どんないじめであったとしても、当事者(「いじめっ子」と「いじめられっ子」)に対応するだけでなく、潜在的な加害者を想定した指導がとくに必要だと

思われる。ここでは、クラスみんなで話しあわせたということが、これに類することになる。そのことを考えると、この割合がよりいっそう高くなってもよい。

これ以外の対応としては、全職員の問題として、職員会議で話しあったというものがある。しかし、いじめというきわめてやっかいな問題であるうえ、しかもこの解決には教師集団の協力体制が不可欠であるにもかかわらず、この割合があまりにも低すぎる。むしろ、これに関しては、その教師の問題というより、その学校における教師集団の人間関係に関する問題、校長・教頭といった管理職のリーダーシップ能力に関する問題がかなり大きな要素であることはまちがいない。

そして、いま1つの問題として、ほかの機関にゆだねたという割合がかなり低いという事実もある。たしかに、ほかの機関にゆだねるほど、深刻ないじめではなかったということも考えられる。しかし、これら一連の事実からすれば、あくまで結果論とはいえ、担任教師が、いじめ問題を自分1人でかかえこんでしまっているという実態をものがたっている。つまり、いじめ問題がおこっても、学校における全職員の問題として話しあうわけでもなく、ほかの機関にゆだねるわけでもなく、担任教師が1人で対応しているという状態である。

なお、そうしたいじめのいまの状態については、つぎのような結果がみられる。小学校教師の回答では、完全に解決した28.4%、やや解決した41.6%、あまり解決していない8.0%、そしてまったく解決していない1.6%といったそれぞれの割合である。中学校教師では、順に29.5%、45.0%、5.2%、1.2%になる。これと、子どもたちを対象に実施した同様の調査の結果と比べてみると、教師のほうがやや楽観的な姿勢がうかがえる。したがって、教師からみてある程度解決していると思っているいじめでも、再燃する可能性、ないしは危険性はかなり残されているといえる。というより、いじめという行為を考えてみれば、いったん「鎮静化」しているようにみえても、いつまた「再燃」するともかぎらない。まして、いまだ完全に解決していないいじめであれば、再燃の可能性はかなり高いと考えてよい。

3. いじめ問題に対する教師集団の協力体制

ところで、さきほどいじめ問題の解決には、教師集団の協力体制が不可欠の条件と述べた。これに関する結果を、ここで紹介しておきたい。まず、養護教諭の対応である。実際におこったいじめ問題に対して、養護教諭が積極的に対応してくれたという小学校教師は33.6%、かなり対応してくれた41.1%、あまり対応してくれなかった10.4%、まったく対応してくれなかったという割合が4.3%である。中学校教師になると、順に34.9%、40.4%、11.6%、4.1%である。今回の調査におけるサンプルの抽出から考えると、小・中学校ともに、全体の7割から8割ほどの学校では、いじめ問題に対して養護教諭との協力体制はよく取れていると思われる⁵⁾。しかし、いっぽう全体の2割近くの小・

中学校では、養護教諭との協力体制はあまり取れていないということになる。

似たような結果は、つぎの生徒指導部の対応においてもみられる。小学校教師の回答をみると、積極的に対応してくれたという割合から順に28.8%、41.6%、17.0%、そして3.5%である。中学校教師においても、順に38.1%、41.0%、12.5%、1.7%といったような状況である。また、校長・教頭の対応についても、ほぼ同様の結果である。小学校教師では順に26.5%、44.0%、17.5%、3.8%、中学校教師の場合も30.2%、36.9%、19.5%、6.7%といった具合である。

こうした結果を総合すると、全体のほぼ7割程度の小・中学校では、いじめ問題に対して養護教諭、生徒指導部、校長・教頭との協力体制は、ある程度うまくいっていると考えられる。しかし、2割ほどの小・中学校では、こうした協力体制にかなり問題をかかえていると判断してよい。おそらく、養護教諭との協力体制に問題のある学校では、同じく生徒指導部、そして校長・教頭との協力体制にも問題があると思われる。というのは、こうした協力体制に関しては、その学校の教師集団の人間関係や、校長のリーダーシップ能力と密接に結びついているからである。

たとえば、教師集団の人間関係がとてもよいという小学校教師の場合、養護教諭が積極的に対応してくれたという割合は40.0%を数えている。そして、教師集団の人間関係がややよいというもの36.7%、あまりよくない23.1%、まったくよくないという場合では22.2%にすぎない。中学校教師においても、教師集団の人間関係がとてもよいという場合は47.8%、ややよい34.8%、あまりよくない30.3%、まったくよくないということになると11.1%にとどまっている。

生徒指導部の対応に関しても、まったく同様の結果である。小学校教師について、生徒指導部が積極的に対応してくれたという割合を順に示しておくと、教師集団の人間関係がとてもよい47.7%、ややよい31.2%、あまりよくない14.4%、そしてまったくよくないという場合はこの割合がゼロである。中学校教師でも、順に56.5%、38.8%、24.2%、そしてゼロといった状況である。教師集団の協力体制といったものが、人間関係にかなり規定されている様子がよくわかる。それにしても、協力体制というフォーマルな問題に、人間関係というインフォーマルな要素が影響をおよぼしている状況にはかならない。

これに加えて、校長のリーダーシップ能力という要素もある。あえて指摘するまでもなく、校長にリーダーシップ能力がある場合は、協力体制もうまくいく。しかし、これがない場合、協力体制にも支障をきたしている。いまの校長にはリーダーシップ能力がとてもあるという小学校教師の回答をみると、生徒指導部が積極的に対応してくれたという割合は44.3%、リーダーシップ能力がややある29.8%、あまりない24.5%、まったくよくないという場合は23.3%である。中学校教師の回答をみても、順に56.1%、36.5%、38.1%、14.5%といったようになる。

そして、当然といえば、当然の結果もある。いまの校長にはリーダーシップ能力がと

でもあるという小学校教師の場合、校長・教頭が積極的に対応してくれたという割合は63.9%、リーダーシップ能力がややある29.8%、あまりない18.5%、そしてまったくないということになるとわずか6.8%である。中学校教師でも、順に56.1%、33.6%、26.6%、4.8%である。

こうした一連の状況をみても、いじめ問題に対する教師集団の協力体制といっても、教師1人ひとりの問題というわけではないことがわかる。教師集団の人間関係といふかなりインフォーマルな要素や、校長・教頭といった管理職のリーダーシップ能力に規定されている部分が少なくない。いや、教師集団の人間関係に関しても、結局のところ管理職の能力しだいである。その意味で考えても、管理職のリーダーシップ能力、管理能力が、もっと問われてもよい。

4. いじめの早期発見のための取り組み

ここまで述べてきた教師の対応は、あくまでも実際にいじめが生じたときのことである。では、多くの教師は、日常的にいったいどんな対策を講じているのか。まず、表4-1に示した結果をみておきたい。これは、いじめの早期発見のための教師の取り組みをまとめたものである。ここでは、左側が教師の取り組みの内容、そして右側はそのうちもっとも力をいれている内容を示したものである。

とくに、左側の結果を中心に割合の高いものをあげておくと、小学校教師の場合は、なんでも話せる雰囲気を作っている、子どもと接する時間を多くもつようにしている、日記（個人、班、学級など）を書かせている、朝の会や帰りの会で話をさせるといった順位で並んでいる。中学校教師では、子どもと接する時間を多くもつようにしている、日記（個人、班、学級など）を書かせている、なんでも話せる雰囲気を作っているといったようなものである。

多くの教師がいじめの早期発見のために、それなりの取り組みをしようとしている姿

表4-1 いじめの早期発見のために取り組んでいること 単位：%(左側はM.A.)

取り組み	取り組みの内容 (M.A.)			もっとも力を入れている内容		
	小学校教師	中学校教師	計	小学校教師	中学校教師	計
日記(個人、班、学級など)を書かせている	51.5	66.3	58.1	22.2	38.7	29.6
投書箱をおいている	3.3	3.5	3.4	0.7	0.6	0.7
朝の会や帰りの会で話をさせる	40.0	14.5	28.6	7.3	2.6	5.2
クラスでの話しあい活動を充実させている	20.8	24.4	22.4	2.1	4.1	3.0
なんでも話せる雰囲気を作っている	78.5	64.8	72.4	41.1	21.8	32.5
子どもと接する時間を多くもつようにしている	69.3	70.6	69.9	21.5	23.8	22.6
家庭への連絡網を作って、情報をキャッチしている	11.6	9.6	10.7	0.9	1.2	1.0
家庭訪問を行ない、連絡を密にしている	9.9	20.3	14.6	0.2	1.2	0.7
その他	4.0	4.4	4.2	1.7	2.0	1.8
D.K., N.A.				2.1	4.1	3.0
計 (N)	100.0(423)	100.0(344)	100.0(767)	100.0(423)	100.0(344)	100.0(767)

勢は感じられる。しかし、なんでも話せる雰囲気を作っているといった回答に代表されるように、いささか抽象的で曖昧な印象がぬぐえない。そして、いじめの早期発見に関して、より積極的で直接的な家庭との情報交換、家庭訪問といったことについては、あまり積極的ではない。いわば、いじめ問題に関する家庭との連携に、あまり積極的ではないといってもよい。

むろん、家庭訪問については、時間的な制約もあり、むずかしい側面もある。しかし、家庭との連絡網については、かならずしも困難な課題ではない。ところが、これについても割合はかなり低い。もはや指摘するまでもなく、いじめ問題は多くの人たちの協力がなければ、解決はとても困難である。とくに、さきほどの教師集団の協力体制や連携、そして家庭との連携はまさに必要不可欠な条件といっても過言ではない。

そして、いじめ問題に関して、家庭との連携が不可欠ことはつぎの結果からも明らかである。もし、いじめられたとき、まっさきに相談しようと思っている人は、小学生では友人32.3%、母親29.6%、先生9.8%、父親6.6%、そして兄・姉が4.1%である。中学生でも、順に友人44.1%、母親13.6%、先生10.2%、兄・姉3.3%、そして父親1.8%といったような結果である。なお、参考までに、だれにも相談しないという割合は、小学生が13.5%、中学生は20.5%である。

ともかく、子どもたちが相談しようと思っている相手は、友人であり、母親である。教師に相談しようと思っている割合は、この両者より明らかに低い。この結果をみるだけでも、いじめ問題に関して家庭との情報交換、連携、そしてできることなら協力体制が不可欠である。ところが、実際には家庭との連絡網については小・中学校教師ともにほぼ1割程度、家庭訪問でも中学校教師は2割にのぼっているが、小学校教師はこれまた1割程度にすぎない。

しかも、こうした傾向は、自分のクラスでいじめが比較的良好におこっているという教師でもあまり変わらない。たとえば、いじめがときどきあるという小学校教師の場合、家庭との連絡網の割合は12.6%、いじめがあまりないという教師は12.3%、まったくないという教師が9.2%である⁶⁾。中学校教師では、いじめがよくあるという場合でもこの割合はゼロ、ときどきある8.8%、あまりない9.8%、まったくないという教師が16.4%である。

家庭訪問については、いじめがときどきあるという小学校教師が14.7%、あまりない3.9%、まったくない11.3%といったそれぞれの割合である。中学校教師では、いじめがよくあるという場合26.7%、ときどきある21.1%、あまりない16.4%、そしてまったくないという教師も16.4%である。この結果をみると、自分のクラスでいじめが比較的良好におこっているという教師でも、それほど家庭との連絡を密にしているというわけではない。

いずれにしても、いまのところ家庭との連携に積極的な教師はあまり多くない。さきほど、いじめ問題に関して担任教師が1人でかかえこんでいる実態があると述べた。こ

うした状況が、やはりここでも明らかである。

5. いじめをおこさせないための取り組み

今度は、いじめに対するより日常的な指導の実態についてみておきたい。いじめをおこさせないための取り組みの内容である。まず、小・中学校教師が、これに関してどんな取り組みをしているのかみておくと、つぎのようになる。小学校教師では、もっとも割合の高いものが人権学習の教材を取りいれている83.0%、ついで学級での話しあい活動80.9%、命の尊重に関する教材を取りいれている70.0%、いじめに関する文学教材を取りいれている23.6%、さらにロールプレイによる体験活動7.6%、子どもの行動を観察し人間関係を把握する4.3%といった順位である。これ以外にも、「道徳」の授業の充実、学級全体での活動を取りいれ人間関係づくりを行なっている、班活動の充実、自主性を育てる、ストレスの自覚と発散、などといった多様な取り組みがみられるが、いずれも割合自体はごくわずかである。

いっぽう、中学校教師でも順位にまったくちがいはない。順にあげていくと、人権学習の教材80.8%、学級での話しあい活動70.9%、命の尊重に関する教材59.3%、いじめに関する文学教材29.9%、そしてロールプレイが3.8%といった状況である。これ以外にもさまざまな試みがみられるが、いずれも割合はかなり低い。そうした状況から考えると、多くの教師が個人的にさまざまな取り組みを摸索していることは十分に理解できる。しかし、そのどれをみても具体性に乏しいうえ、あまり「特効薬」になりえていない現実がうかがえる。その結果、いじめに対する「一般的な」指導としての人権学習、学級での話しあい、命の尊重に関する教材、そしていじめに関する文学教材に集中しているともいえる。

それでは、こうした取り組みのなかで、もっとも力をいれている内容についてふれておきたい。小学校教師では、もっとも力をいれているものは学級での話しあい活動40.0%、つぎに人権学習の教材24.6%、命の尊重に関する教材18.9%、子どもの行動を観察し人間関係を把握3.3%、そしていじめに関する文学教材が2.4%である。中学校教師では、人権学習の教材37.8%、学級での話しあい活動27.3%、命の尊重に関する教材14.5%、いじめに関する文学教材が4.9%になる。

小学校教師の場合は、人権学習やいじめ、そして命の尊重に関する教材を取りいれることに力をいれている教師と、学級での話しあい活動に力をいれている教師が、ほぼ半々といったところである。中学校教師になると、学級での話しあい活動より、人権学習やいじめ、命の尊重に関する教材を取りいれることに力をいれている教師が多くなっている。

ところで、いじめに対する指導というのは、たんなる「知識注入型」の実践だけでなくとかなるものではない。身をもって教える、態度で教える。これに依存すべき部分が

ほとんどといっても、過言ではない。一般に、こうした指導は、学校の主要な機能としての道徳的社会化 (moral socialization) の領域に属する。これは、知識・技術の指導を主とする認知的社会化 (cognitive socialization) と異なり、そこに適切な規範的 (道徳的) 環境が整えられていなければ、これのよりよい指導はむずかしい。なかでも、とくに教師1人ひとりの、そして教師集団のもつ姿勢や態度、行動といったものが重要な意味をもっている。

かりに、教師が人権学習やいじめ、命の尊重に関するさまざまな教材を使って、いじめに対する指導を充実させたとしても、その教師みずからがそれに逆行するような態度や行動を取っているとすれば、その教育効果はほとんどないに等しい。おそらく、子どもたちはその「知識」そのものは学んだかもしれないが、それを自己のなかに内面化するにはいたっていない。そのこともふくめて、今度は教師の姿勢に関する一連の状況についてみておきたい。

6. 教師-子ども関係といじめ

いじめの事実を教師に言わないということが、よく話題になる。しかし、表6-1に示した結果をみると、それも当然といわざるをえないような状態である。子どもたちは、いじめの事実を教師に言わないというだけではない。どんなことに関しても、子どもたちはあまり教師に相談をしていない。教師に相談することが、よくあるという小学生は7.9%、ときどきあるという割合でも29.9%にすぎない。中学生の場合は、それぞれ8.0%と19.2%である。

表6-1 担任の先生にいろいろなことを相談すること

単位：%

先生に相談すること 学年	よくする	ときどきする	あまりしない	まったくしない	D.K., N.A.	計(N)
小学校5年生	6.3	25.9	44.4	23.1	0.3	100.0(286)
6年生	8.9	32.6	36.9	21.1	0.5	100.0(426)
計	7.9	29.9	39.9	21.9	0.4	100.0(712)
中学校1年生	6.5	15.6	28.6	49.4	0.0	100.0(77)
2年生	6.5	18.4	37.3	36.9	0.9	100.0(217)
3年生	11.0	21.9	40.6	24.5	1.9	100.0(155)
計	8.0	19.2	37.0	34.7	1.1	100.0(449)

しかも、それは相談しても意味がないと思っているだけではなさそうである。むしろ、それ以前に、教師に対する信頼感を喪失してしまっているような状況がある。たとえば、表6-2に示した結果である。教師のやつあたりが、よくあるという小学生は7.0%、ときどきある16.6%といった具合である。中学生でも、順に5.3%と18.0%を数えている。そして、表6-3のえこひいきである。よくするという小学生は9.7%、ときどきするという割合が15.9%である。中学生になると、それぞれ8.7%と19.2%を数えている。

表6-2 担任の先生がやつあたりをすること

単位：％

先生がやつあたりをすること 学年	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K., N.A.	計(N)
小学校5年生	5.9	17.1	28.0	47.6	1.4	100.0(286)
6年生	7.7	16.2	29.1	46.5	0.5	100.0(426)
計	7.0	16.6	28.7	46.9	0.8	100.0(712)
中学校1年生	5.2	10.4	58.4	26.0	0.0	100.0(77)
2年生	4.6	20.7	30.4	43.3	0.9	100.0(217)
3年生	6.5	18.1	25.8	48.4	1.3	100.0(155)
計	5.3	18.0	33.6	42.1	0.9	100.0(449)

表6-3 担任の先生がえこひいきをすること

単位：％

先生がえこひいきをすること 学年	よくする	ときどきする	あまりしない	まったくしない	D.K., N.A.	計(N)
小学校5年生	9.8	13.3	29.4	46.5	1.0	100.0(286)
6年生	9.6	17.6	23.2	49.1	0.5	100.0(426)
計	9.7	15.9	25.7	48.0	0.7	100.0(712)
中学校1年生	5.2	16.9	27.3	50.6	0.0	100.0(77)
2年生	8.8	16.6	38.7	35.5	0.5	100.0(217)
3年生	10.3	23.9	31.0	32.3	2.6	100.0(155)
計	8.7	19.2	34.1	37.0	1.1	100.0(449)

やつあたりであれ、えこひいきであれ、本来からすれば皆無であることがむろん好ましい。しかし、この結果をみるかぎり、けっして少ない割合ではない。しかも、これ以外にも、その日の気分で授業のしかたが変わる、わけもなくおこる、急におこりだす、日によって言うことがちがうといった教師の行動に関して、まったく同様のパターンが認められる。そのうえ、教師が子どもたちをどう呼んでいるのかということに関する問題もある。

小学生では、「くん」をつけて37.6%、「さん」37.4%、「ちゃん」28.1%、「ニックネーム」21.5%、そのいっぽうで「呼びすて」16.0%、「おい・おまえ」2.7%、「きさま」が0.3%である。中学生になると、もっとも多くなるのが「呼びすて」で53.9%、「さん」34.3%、「くん」24.9%、「ちゃん」12.5%、「ニックネーム」9.8%、そして「おい・おまえ」4.5%、「きさま」が1.1%である。さらに、高校生になると、「呼びすて」74.2%、「さん」16.3%、「くん」6.6%、「おい・おまえ」4.2%、「ニックネーム」3.1%、「ちゃん」2.2%、そして「きさま」が1.2%といったようになる。

「おい・おまえ」、「きさま」の類いは論外だとしても、「呼びすて」が中・高校生になると、かなり多くなる。「呼びすて」に関しては、なかには親密感ということもあるかもしれない。しかし、これまでの一連の状況、そして最近の教師と子どもたちとの関係、さらには「人権」という側面を総合して考えると、やはり問題がありそうである。そして、さらに日常的に生じている問題もある。教師に言われた言葉で傷ついたというものである。参考までに、傷ついたことがあるという割合を示しておくと、小学生が4.4

%、中学生は7.8%、そして高校生が12.7%である。

なお、子どもたちが傷ついたという教師の具体的な言葉を、いくつか紹介しておきたい。なお、これに関しては、小・中・高校生ともにほぼ類似したパターンが認められる。それにしても、なかには子どもたちに対する教師の言葉とも思えないようなものである。まず1つは、自分が信用されていないことがわかって傷ついたというもの。「あなたは信用できない」、「そんな人だとは思わなかった」といった言葉である。

2つめに、バカにされたと感じるような言葉である。これに関しては、かなり多数にのぼるが、「そんなこともわからないの」、「おまえはバカか」、「おまえ女か」。子どもたちに対して「おまえ」という表現がかなり多い。そして、「のろま」、「バーカ」、などがある。3つめに、子どもたちの身体的特徴を問題にした言葉がある。「太っている」、「ウデが太い」、「やせたら」といったかなり悪質な言葉が並ぶ。しかも、この種の言葉を回答した子どもが、かなりの数にのぼる。

4つめに、「えこひいき」、「差別」、「ほかの子と比べられる」といった言葉である。そして、最後の5つめは、中・高校生に対する受験や進路選択に関連した言葉である。いくつか紹介しておく、「おまえの成績では高校はムリ」、「おまえは、働けばいい」、「いまは、おまえくらいの頭でも行ける学校はある」、「おまえでも進学するの?」といったものである。これに加えて、内申書を楯にして脅すといった悪質なものである。

いずれの言葉にしても、おそらく思わず使ってしまったということであろう。しかし、そのいっぽうで子どもたちは深く傷ついている。かりに、思わず使ってしまったとしても、あまりに悪質な言葉が多い。というより、こんな悪質な言葉を思わず使ってしまうところに、子どもという存在をどうみているのかという教師の意識や感覚が象徴されている。こんな状態では、子どもたちが教師に相談しないのも無理はない。相談するしないというより、もはや教師に対する信頼感がかなり失われている可能性もある。

そのうえ、これまでみてきたような一連の状況は、ある種のいじめに類する行為といえなくもない。やつあたり、強い立場からの「呼びすて」や「おい・おまえ」、そして言葉によって傷つけられるといった行為は、いずれもいじめの手口に似たものである。そうすると、いじめ行為を容認するような論理と風土を、教師みずからが作りだしているということになる。

それどころか、実際には教師に「いじめられた」と感じている子どもも少なくない。つぎの表6-4に示したように、小・中学生ともに、教師に「いじめられた」と感じている子どもは、決して少ない割合ではない。むしろ、いじめといっても意図的であるとは考えられない。しかし、意図はともかく、子どもたちからみて「いじめ」と感じられる、なんらかの行為があったことだけはたしかである。事実、表6-5の教師自身の回答をみても、学校で子どもを「いじめた」と思うことがあるという⁷⁾。

もはや、子どもたちがいろいろなことを教師に相談しないというだけの問題ではない。これまでの一連の状況をみると、教師自身がいじめを誘発するような環境を作っている

表6-4 先生に「いじめられた」と感じること

単位：％

先生に「いじめられた」 学年	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K., N.A.	計(N)
小学校5年生	5.2	6.3	19.2	68.5	0.7	100.0(286)
6年生	3.5	9.2	19.0	66.9	1.4	100.0(426)
計	4.2	8.0	19.1	67.6	1.1	100.0(712)
中学校1年生	5.2	6.5	19.5	68.8	0.0	100.0(77)
2年生	4.6	9.7	18.0	67.3	0.5	100.0(217)
3年生	3.9	7.1	21.3	67.1	0.6	100.0(155)
計	4.5	8.2	19.4	67.5	0.4	100.0(449)

表6-5 学校で子どもを「いじめた」と思うこと(小・中学校教師の回答)

単位：％

子どもを「いじめた」と思う 学校段階	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K., N.A.	計(N)
小学校教師	0.7	13.7	32.9	44.7	8.0	100.0(423)
中学校教師	0.3	10.2	35.2	48.0	6.4	100.0(344)
計	0.5	12.1	33.9	46.2	7.3	100.0(767)

としかしいようがない。これでは、さきほどのような「人権学習」をいくらやっても、まったく意味はない。

7. 教師の態度・行動といじめ

こうした状況を、あるいは多くの教師は気づいているのかもしれない。これについては、表7-1に示したとおりである。教師の言動が子どもたちのいじめに、おおいに関係しているという小学校教師はなんと36.9%におよんでいる。中学校教師では、この割合が24.4%である。小・中学校教師ともに、子どもたちのいじめに対して影響があると感じている割合が、かなり高い。なかでも、とくに小学校教師である。いうまでもなく、小学校では学級担任制ということもあり、1人の教師と子どもたちが密着した関係を形成している。したがって、子どもたちにとっては、その教師の態度・行動の影響をより受けやすい。

事実、こうした状況を象徴しているようないくつかのデータがある。以下、いずれも小学校における結果である。たとえば、表7-2に示したような状況である。クラスで

表7-1 教師の言動がいじめに関係していると思うこと(小・中学校教師の回答)

単位：％

教師の言動といじめ 学校段階	おおいに関係している	すこしは関係している	あまり関係していない	まったく関係していない	D.K., N.A.	計(N)
小学校教師	36.9	50.8	9.0	2.1	1.2	100.0(423)
中学校教師	24.4	48.5	18.9	6.1	2.0	100.0(344)
計	31.3	49.8	13.4	3.9	1.6	100.0(767)

表7-2 担任の先生がその日の気分によって授業のしかたが変わることと
クラスでいじめが生じること (小学校5・6年生の回答)

単位: %

授業のしかたが変わること クラスでいじめ	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K., N.A.	計(N)
よくある	53.6	14.3	21.4	10.7	0.0	100.0(28)
ときどきある	33.0	39.4	13.8	13.8	0.0	100.0(109)
あまりない	28.6	34.9	25.1	11.4	0.0	100.0(175)
まったくない	15.7	29.3	29.8	24.1	1.0	100.0(382)
D.K., N.A.	16.7	22.2	27.8	22.2	11.1	100.0(18)
計	23.0	31.5	25.8	18.8	0.8	100.0(712)

いじめがよく生じている場合、担任教師がその日の気分によって授業のしかたが変わるという割合が明らかに高い。つまり、その日の気分によって授業のしかたが変わるような教師のクラスでは、いじめが生じやすいということになる。

類似したパターンは、教師のやつあたりやえこひいきについても同様にみられる。クラスでいじめがよくあるという場合、教師のえこひいきがよくある10.7%、ときどきある25.0%、あわせると35.7%になる。いっぽう、クラスでいじめがまったくないという場合では、それぞれ6.8%と13.4%を数えており、あわせて20.2%である。えこひいきについても、クラスでいじめがよくあるという場合、よくする28.6%、ときどきする25.0%、これをあわせると53.6%にも達する。ところが、クラスでいじめがまったくないという場合、それぞれ5.2%と10.7%にとどまっており、あわせても15.9%でしかない。

また、教師に言われた言葉で傷ついたということと、いじめとの関係である。これの「被害者」は、いうまでもなくその子ども自身である。そこで、これに関しては、その子どものいじめ経験との関係を示しておくことにした。クラスのなかで、ほかの子をいじめることがよくあるという場合、教師に言われた言葉で傷ついたという割合が16.7%である。いじめることがときどきあるという子どもたちでは、この割合が12.0%になる。いっぽう、いじめことはあまりないという子どもたちは5.1%、まったくない2.1%といった具合である。あえて指摘するまでもなく、ここには明らかなパターンが認められる。

そして、もっとも重大な教師に「いじめられた」と感じている子どもたちである。こうした子どもたちのいじめ経験を示した結果が表7-3である。ここでは、小・中学生ともに明らかな関係性が認められる。いわば、いじめに関する「連鎖の構造」である。

さらに、深刻な状況もある。というのは、クラスでいじめがよく生じている場合、教師からの「いじめ」が多いという事実である。たとえば、クラスでいじめがよくあるという小学生の場合、教師に「いじめられた」と感じるがよくあるという割合は25.0%、ときどきある10.7%、あわせると35.7%に達している。ところが、クラスでいじめがまったくないという小学生になると、それぞれ1.3%と7.1%で、あわせても8.4%にとどまっている。中学生の場合も、まったく同様である。クラスでいじめがよくあるという場合、「いじめられた」と感じるがよくある18.2%、ときどきある27.3%、あ

表7-3 先生に「いじめられた」と感じることと
クラスのなかではかの子をいじめたこと

単位：％

先生に「いじめられた」 学校段階・クラスの人をいめる		よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K., N.A.	計(N)
小学生	よくある	33.3	50.0	16.7	0.0	0.0	100.0(6)
	ときどきある	9.8	15.2	26.1	47.8	1.1	100.0(92)
	あまりない	5.1	9.8	26.2	58.4	0.5	100.0(214)
	まったくない	2.1	4.8	13.2	78.6	1.3	100.0(378)
	D.K., N.A.	0.0	4.5	22.7	68.2	4.5	100.0(22)
	計	4.2	8.0	19.1	67.6	1.1	100.0(712)
中学生	よくある	20.0	30.0	0.0	50.0	0.0	100.0(10)
	ときどきある	3.6	20.0	20.0	56.4	0.0	100.0(55)
	あまりない	8.8	9.9	23.1	57.1	1.1	100.0(91)
	まったくない	2.8	4.9	18.7	73.2	0.4	100.0(284)
	D.K., N.A.	0.0	0.0	22.2	77.8	0.0	100.0(9)
	計	4.5	8.2	19.4	67.5	0.4	100.0(449)

わせると45.5%にもなる。いっぽう、クラスでいじめがまったくないという場合には、それぞれ2.9%と5.3%、あわせてもわずか8.2%である。

したがって、教師に「いじめられた」と感じている子どもたちが、いじめに走っているというだけではない。それと並んで、いやそれ以上に深刻な事態は、子どもたちからみて「いじめられた」と感じさせるような態度・行動を取っている教師のクラスでは、いじめがよく生じているという状況である。

8、教師の教育活動といじめ

いじめを誘発してしまうような状況を作っているのは、たんに教師の態度・行動だけではない。教師の日常的な教育活動のなかにも、これに類することがある。たとえば、班競争や、連帯責任で罰をあたえるという活動である。なお、これまでと同様に、これについても、やはり小学校においてより明らかなパターンがみられる。そこで、ここでも小学校における状況を中心にみていくことにしたい。

班競争や連帯責任で罰をあたえるという教育活動については、その是非をはじめとして、さまざまな議論がある。しかし、実際には、多くの教師がこの種の教育活動を取りいれている。たとえば、班で競争させることが、よくあるという小学校教師は3.1%、ときどきある31.9%、あまりない43.5%、そしてまったくないという割合が20.3%である。また、連帯責任で罰をあたえるということについても、よくあるということから順に0.7%、14.7%、45.6%、そして38.5%といった具合である。

ところが、こうした教育活動が、いじめに結びついているという傾向もないわけではない。たとえば、クラスでいじめがよくあるという小学生の場合、班競争がよくあるという割合は10.7%、ときどきあるという割合が39.3%になる。ところが、クラスでいじ

めがまったくないという場合では、班競争がよくある5.8%、ときどきある32.5%といった状況である。むろん、それほど大きな結びつきではない。しかし、班競争といじめとのあいだに、一定の関係性のあることだけはたしかである。

こうしたパターンは、連帯責任で罰をあたえるということになると、さらに明確になる。表8-1に示したように、いじめがよく生じているクラスほど、連帯責任で罰をあたえるという教育活動がよく取りいれられていることがわかる。そして、連帯責任で罰を加えられた子どもほど、クラスのなかでほかの子をいじめることがよくあるという割合が高い。この結果を示しておく、クラスのなかでほかの子をいじめることがよくあるという小学生の場合、連帯責任というかたちで罰を受けることが、よくあるという割合が16.7%、ときどきある50.0%、あわせると66.7%に達している。

表8-1 「連帯責任」というかたちで罰を受けたこととクラスでいじめが生じること
(小学校5・6年生の回答)

単位：%

連帯責任で罰を受けたこと クラスでいじめ	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K., N.A.	計(N)
よくある	17.9	28.6	21.4	32.1	0.0	100.0(28)
ときどきある	13.8	21.1	28.4	33.9	2.8	100.0(109)
あまりない	7.4	21.1	36.0	34.9	0.6	100.0(175)
まったくない	3.1	11.5	37.2	47.1	1.0	100.0(382)
D.K., N.A.	0.0	11.1	33.3	50.0	5.6	100.0(18)
計	6.3	16.0	34.8	41.6	1.3	100.0(712)

ほかの子をいじめることが、ときどきあるという子どもたちになると、連帯責任で罰を受けることがよくある15.2%、ときどきある20.7%、あわせて35.9%である。いっぽう、ほかの子をいじめることが、あまりないという子どもたちでは、それぞれ7.5%と22.9%を数えており、あわせて30.4%である。さらに、ほかの子をいじめることが、まったくないという子どもたちの場合では、順に3.7%と10.1%で、あわせても13.8%にすぎない。こうした結果をみても、班競争や連帯責任で罰をあたえるという教育活動が、あくまでも結果論とはいえ、子どもたちのいじめを誘発しているという事実はやはり否定できない。

また、つぎの表8-2に示した結果である。これをみると、クラスでいじめがよくあるという場合、担任の先生が話をよく聞いてくれるという割合が明らかに少ない。子どもたちには、教師と話をしたい、教師に話を聞いてもらいたい、そしてなかにはかれらなりの要求もあるかもしれない。しかし、それが阻害された状態が続けば、当然のことながらある種の欲求不満が生じる。それが、結果的にいじめを誘発してしまう状況を生みだしているともいえる。子どもたちの話をよく聞いてやる。教師として当然の責務である。しかし、多忙な日常性のなかで、こんな当然のことすらおろそかになっているのかもしれない。ところが、その背後でいじめが生じている可能性も、けっして少なくはない。

表 8-2 担任の先生が話をよく聞いてくれることと

クラスでいじめが生じること (小学校 5・6 年生の回答)

単位: %

話をよく聞いてくれる クラスでいじめ	よく聞いてくれる	ときどき聞いてくれる	あまり聞いてくれない	まったく聞いてくれない	D.K., N.A.	計(N)
よくある	21.4	32.1	39.3	3.6	3.6	100.0(28)
ときどきある	29.4	49.5	17.4	1.8	1.8	100.0(109)
あまりない	45.7	36.0	15.4	2.9	0.0	100.0(175)
まったくない	49.0	38.5	9.7	1.8	1.0	100.0(382)
D.K., N.A.	44.4	44.4	0.0	0.0	11.1	100.0(18)
計	44.0	39.5	13.2	2.1	1.3	100.0(712)

9. 教師同士のいじめ

教師の姿勢に関してよりいっそう深刻な事態は、教師同士のあいだにもいじめがあるという事実である。まず、表 9-1 に示した結果である。いまの学校で教師同士のいじめがまったくないという割合に注目してみると、小学校教師の回答では 46.6%、中学校教師でも 42.7% である。そうすると、今回の調査のサンプリングの状況を考えると、全体のほぼ 4 割から 5 割の小・中学校で教師同士のいじめが生じているということになる。

表 9-1 いまの学校で教師同士のいじめ

単位: %

教師同士のいじめ 学校段階	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K., N.A.	計(N)
小学校教師	2.6	12.5	30.3	46.6	8.0	100.0(423)
中学校教師	2.9	17.7	30.5	42.7	6.1	100.0(344)
計	2.7	14.9	30.4	44.9	7.2	100.0(767)

そして、その手口をみてみると、つぎのようになる。小学校教師について、割合の高いものから順に上位 10 位までをあげておくと、陰口を言う 52.1%、いやみを言う 37.0%、話をしない 22.9%、職員会議での発言を無視する 21.9%、みんなで無視する 17.2%、言葉で脅す 15.1%、仲間はずれにする 14.6%、冷やかしを言う 12.5%、職員会議での発言を取りあげない 9.9%、そして主な校務分掌からははずすということが 7.8% である。

中学校教師の場合は、陰口を言う 51.7%、いやみを言う 37.5%、話をしない 34.1%、職員会議での発言を無視する 21.0%、冷やかしを言う 17.0%、みんなで無視する 16.5%、生徒にその教師の悪口を言う 14.8%、仲間はずれにする 13.1%、その教師の意見にみんなで反論する 13.1%、連絡をしない 10.8% といった具合。過激な手口と思われるような内容でも、かなり高い割合を数えていることに驚かされる⁸⁾。

ところで、これまでみてきた数値は、あくまでもそれぞれの学校における状況である。今度は、実際にほかの教師からいじめられることがあるという割合について示しておくことにしたい。表 9-2 の結果をみればわかるように、全体の 4 割にもおよぶ小・中学校教師が、程度の差はあれ、ほかの教師からいじめられたという経験をもっている。そ

表9-2 ほかの教師からいじめられること

単位：％

いじめられること 学校段階	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D. K., N. A.	計(N)
小学校教師	2.8	10.2	31.4	54.6	0.9	100.0(423)
中学校教師	3.2	11.6	25.3	58.1	1.7	100.0(344)
計	3.0	10.8	28.7	56.2	1.3	100.0(767)

して、全体の1割をこえるほどの教師が、比較的よくいじめを受けているという。こうした結果をみても、教師同士のいじめがけっして少なくないことがよくわかる。

むろん、そうした教師が受けた行為を、そのまま「いじめ」という言葉で表現することには批判がないわけではない。しかし、残念ながら教師集団には、かりに「いじめ」と呼ばなくても、それに類する行為の多いことも事実である。たとえば、ほかの教師から陰口を言われたという小学校教師は46.1%、中学校教師でも48.5%を数えている。いやみを言われたということでも、小学校教師が58.6%、中学校教師は60.5%になる。冷やかしを言われたということでは、それぞれ順に43.0%と45.3%である。

さらに、無視された24.1%と21.5%、言葉で脅された22.9%と18.3%、仲間はずれにされた17.0%と15.4%というような割合を数えている。陰口、いやみ、冷やかしといったものならともかく、無視、言葉とはいえ脅し、仲間はずれといった行為は、やはり悪質である。しかし、こうした行為であっても、一定の割合を数えている。それが、すべて「いじめ」ではないにしても、かなり悪質な「いやがらせ」行為が、教師集団に蔓延していることはまちがいない。

そのうえ、新しいなんらかの教育実践をしようとして、ほかの教師から足を引っ張られるということまである。小学校教師では、足を引っ張られることがよくある3.5%、ときどきある17.3%、あまりない44.9%、そしてまったくないという割合が31.9%にとどまっている。中学校教師でも、順に5.5%、20.9%、40.1%、30.8%といった割合である。さきほど述べたような「いやがらせ」行為が、まさに教育実践レベルにまでおよんでいる事実をものがたっている。

こうした一連の状況をもみても、それぞれの学校における教師集団の人間関係が、かなり荒廃している事実がうかがえる。たとえば、いまの学校で同僚教師から陰口を言われている先生がいるという割合は、小学校教師で67.1%、中学校教師になると73.5%に達している。そのうえ、この事実に対する教師の意識が、また問題である。陰口を言われて当然という割合が、小学校教師では51.1%、中学校教師でも46.2%を数えている。これに続いて、小学校教師では、気の毒だと思う32.7%、とても腹が立つ10.9%といったものが並ぶ。中学校教師の場合でも、順に気の毒だと思う27.7%、とても腹が立つという割合が10.7%である。陰口を言われて当然という意見が、その教師に対する同情的な意見を、かなりうわまわっている。

その教師がどんな教師なのかという問題はともかく、教師集団が穏やかな人間関係で

はないことはたしかなようである⁹⁾。事実、いまの学校で教師同士が人間関係のことでめめることが、よくあるという小学校教師は2.4%、ときどきある26.7%、あまりない48.0%、そしてまったくないという割合は15.8%にすぎない。中学校教師の場合でも、順に1.7%、32.6%、48.3%、11.6%である。そのうえ、いまの学校で仕事で困ったり悩んだりしていても手を貸したくない先生が、たくさんいるという小学校教師は1.2%、すこしいる18.9%、あまりいない30.3%、まったくいないという割合が41.1%である。中学校教師では3.2%、25.6%、32.0%、32.0%といった状況である。

さらに、いまの学校で教師同士の小集団グループが、たくさんあるという小学校教師は8.5%、すこしある51.1%、あまりない29.8%、まったくないという割合はわずか10.2%である。中学校教師においても9.3%、61.0%、23.2%、5.5%である。また、いまの学校で孤立している先生が、たくさんいるという小学校教師は1.2%、すこしいる24.8%、あまりいない30.7%、そしてまったくいない34.8%といった割合である。中学校教師では、順に0.6%、29.7%、37.5%、25.6%をそれぞれ数えている。

教師集団の人間関係がいかに崩れているか、もはや想像にかたくない。教師集団が、対立、集団的排斥、そしていじめの構造に支配されているといっても過言ではない。そして、こんななかにいれば当然ともいえる結果がある。多くの教師が、こうした人間関係に疲労している。教師集団の人間関係がわずらわしいと、よく思うという小学校教師は12.1%、ときどき思う37.8%、あまり思わない33.3%、そしてまったく思わないという割合はわずか9.7%である。中学校教師でも8.4%、41.0%、35.8%、そして9.3%である。

また、人間関係のことでイライラすることが、よくあるという小学校教師は6.1%、ときどきある32.4%、あまりない43.0%、まったくないという割合が11.3%である。中学校教師の場合は6.7%、35.8%、41.6%、10.5%である。そして、人間関係について悩むことが、よくあるという小学校教師は9.9%、以下ときどきあるから順に43.7%、30.7%、6.9%である。中学校教師は11.3%、41.0%、34.3%、6.7%である。荒廃した人間関係のなかで、これに悩み、疲労している教師の姿が、じつに明らかである。

10. 教師同士のいじめと子どもたち

教師同士が、多少もめたり、対立したとしても、これが教師同士のレベルにとどまっているのであれば、まだ問題は少ない。しかし、そんなことはありえない。学校という狭い社会のなかで、しかも教師と子どもたちが日常的に密着したなかでは、教師同士の人間関係に子どもたちが気づかないはずはない。

というより、表10-1に示した結果をみればわかるように、教師みずからが子どもたちにほかの先生の悪口を言うといったことも少なくない。こんな状態では、教師集団の人間関係に、子どもたちが気づくとか気づかないといったレベルを明らかにこえている。

それを象徴しているような事実が、つぎの結果である。担任教師がほかの教師からいじめられていると、とても思うという小学生は2.2%、やや思う11.8%、あまり思わない16.8%、そしてまったく思わないという割合が68.0%である。中学生でも、順に3.8%、14.3%、23.2%、そして58.5%である¹⁰⁾。

表10-1 担任教師がほかの先生の悪口を言うこと(小・中学生の回答)

単位: %

担任教師がほかの先生の悪口を言うこと 学校段階	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K., N.A.	計(N)
小学生	3.3	11.8	16.8	68.0	0.1	100.0(782)
中学生	3.8	14.3	23.2	58.5	0.3	100.0(763)
計	3.6	13.0	19.9	63.3	0.2	100.0(1545)

(注) 1、これは、1992(平成4)年7月、9月～11月に、小学生(5・6年生)、および中学生(全学年)を対象に実施した調査の結果による。データなど詳細については、以下の論文を参照のこと。

秦 政春「小学生のストレス『教育ストレス』に関する調査研究(Ⅳ)―」(『福岡教育大学紀要』第43号)、1994年、129～182ページ。秦 政春「中学生のストレス『教育ストレス』に関する調査研究(Ⅴ)―」(『福岡教育大学紀要』第44号)、1995年、119～195ページ。秦 政春「子どもたちのストレスと非行・問題行動『教育ストレス』に関する調査研究(Ⅵ)―」(『福岡教育大学紀要』第45号)、1996年、109～170ページ。

また、担任教師がほかの教師をいじめているということについても、とても思うという小学生が2.2%、やや思う2.2%、あまり思わない13.9%、まったく思わない81.5%といった状況である。中学生では、それぞれ順に1.8%、4.1%、19.4%、74.0%である。むろん、とても思う、やや思うという割合は、それほど高いものではない。しかし、ここで問題にしている内容は、いうまでもなく教師同士のいじめに、どの程度の子もたちが気づいているのかということである。そのことを考えれば、とても思う、やや思う、そしてあまり思わないという割合がゼロであっても不思議なことではない。しかし、実際には小・中学生のほぼ2～3割の子もたちは、むろん程度の差はあるものの、教師同士のいじめに気づいている。それだけでも、大変な問題といわざるをえない。

そのうえ、よりいっそう重大な問題もある。教師同士にいじめが生じている場合、子ども同士にもやはりいじめが生じているという実態である。たとえば、表10-2と表10-3に示した結果をみると、クラスで子どもたちのいじめがよく生じているほうが、その教師自身がほかの先生からいじめられるという割合が高い。驚くほどの差異がある

表10-2 自分自身がほかの教師からいじめられることと

クラスでいじめが生じること(小学校教師の回答)

単位: %

いじめられること クラスでいじめ	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D.K., N.A.	計(N)
ときどきある	2.1	13.7	32.6	51.6	0.0	100.0(95)
あまりない	3.2	11.0	35.7	49.4	0.6	100.0(154)
まったくない	2.8	5.7	26.2	63.1	2.1	100.0(141)
D.K., N.A.	3.1	15.6	28.1	53.1	0.0	100.0(32)
計	2.8	10.2	31.3	54.7	0.9	100.0(422)

(注) 1、小学校教師の場合、クラスでいじめが生じることが「よくある」という回答は1ケースのため、これについては集計から除外した。

表10-3 自分自身がほかの教師からいじめられることと
クラスでいじめが生じること（中学校教師の回答）

単位：％

いじめられること クラスでいじめ	よくある	ときどきある	あまりない	まったくない	D. K., N. A.	計(N)
よくある	0.0	13.3	53.3	26.7	6.7	100.0(15)
ときどきある	6.1	18.4	21.9	51.8	1.8	100.0(114)
あまりない	2.5	7.4	28.7	60.7	0.8	100.0(122)
まったくない	1.6	9.8	21.3	67.2	0.0	100.0(61)
D. K., N. A.	0.0	6.3	18.8	68.8	6.3	100.0(32)
計	3.2	11.6	25.3	58.1	1.7	100.0(344)

というわけではないが、そこにはやはり一定のパターンがある。つまり、このことは教師同士のあいだにいじめが生じている場合、子どもたちにもいじめが生じやすいということをものがたっている。

その両者の結びつきに関するメカニズムを明らかにすることは、きわめて困難である。いじめられることによる教師のストレスが、子どもたちに対してなんらかのネガティブな態度や行動を生み、それによって結果的に子どもたちにストレスが生じてしまう。そのストレスによって、子どもたちがいじめに走るということも考えられる。あるいは、より直接的な要因として、教師同士のいじめに気づいている子どもたちのあいだに、いじめを容認するような意識が生じているのかもしれない。それ以上に、こんなクラスでは、人間関係に関して教師も子どもたちも、ともに「荒れて」いる可能性もある。

いってみれば、教育モデルとしての教師の姿勢ということであり、いじめを容認するような環境の形成ということになる。いずれにしても、このことからすれば教師集団の人間関係に問題をかかえている学校ほど、子どもたちのいじめも多いということはまちがいない。こんな状態では、いくら教師が熱心にいじめに関する指導をしたところで、効果がないのも当然といわざるをえない。

これまで、いじめに対してどんな対応をするか、いじめをおこさせないためにどんな指導をするかといったことばかりに、議論が集中してきたような気がする。それは、それとして重要なことにちがいない。しかし、それ以前に教師の日常的な態度や行動、教育活動、そして教師集団の人間関係を、きちんと点検する必要がとくに求められている。

【註】

- 1) 詳細については、以下の論文を参照のこと。秦 政春「いじめ問題と子ども－いじめ問題に関する調査研究(I)－」(『福岡教育大学紀要』第47号)、1998年、15～68ページ。なお、本小論は、この論文と一連のものである。
- 2) データの詳細については、「前掲論文」を参照されたい。
- 3) いまのクラスで、子ども同士のいじめがおこることが「まったくない」というサンプル、およびこれに関して無記入のサンプルは、集計から除外した。

- 4) いまのクラスで、子ども同士のいじめがおこることが「よくある」、「ときどきある」、そして「あまりない」というサンプルのなかで、いじめのサインが「あった」と回答したものだけを集計した。
- 5) 今回の調査のサンプルの抽出は、それぞれの学校あたりほぼ数名である。そのことから考えると、それぞれのサンプルは、各学校を代表していると理解してよい。したがって、学校の状況に関する各サンプルの意見は、そのままそれぞれの学校の実態を示すものと考えられる。
- 6) 小学校教師の場合、クラスでいじめが生じることが「よくある」という回答は1ケースのため、これについては集計から除外した。
- 7) どんなときに子どもを「いじめた」と思ったのか、教師1人ひとりの自由記述の回答をみると、つぎのような記述がある。「必要以上に叱ってしまった」、「なにげなく子どもが傷つくようなことを言ってしまった」、「みんなのまえで皮肉を言った」、「特定の子どもだけ集中的に叱ってしまった」、「いじわるな言いかたをして叱った」、「子どもが負担になるほどの課題を与えた」、「体罰を行なった」、「相手にしなかった(無視)」、「口で威圧的に問い詰めた」、「事情を聞かずに説教をした」、「感情的になってしまった」、「昔のことをほじくり返して説教しなおした」、「比較したり陰険な叱りかたをした」、「自分がイライラしていて、あたってしまった」、など。
- 8) 割合自体はそれほど高いものではないが、なかには驚くほど過激で陰湿ないじめ行為もある。
- 9) よく陰口を言われている教師としては、校長・教頭、力量のない先生、出世を気にしている先生、サラリーマン的な先生、無責任、自己中心的な先生というものがある。しかし、なかには教育熱心な先生というものもけっして少なくない割合を数えている。
- 10) ここにあげた、担任教師がほかの先生の悪口を言う、担任教師がほかの先生からいじめられている、そして担任教師がほかの先生をいじめているということに関しては、1992(平成4)年7月、9月～11月に、小学生(5・6年生)、および中学生(全学年)を対象に実施した調査の結果による。データなど詳細については、以下の論文を参照のこと。秦 政春「小学生のストレス『教育ストレス』に関する調査研究(Ⅳ)-」(『福岡教育大学紀要』第43号)、1994年、129～182ページ。秦 政春「中学生のストレス『教育ストレス』に関する調査研究(Ⅴ)-」(『福岡教育大学紀要』第44号)、1995年、119～195ページ。秦 政春「子どもたちのストレスと非行・問題行動『教育ストレス』に関する調査研究(Ⅵ)-」(『福岡教育大学紀要』第45号)、1996年、109～170ページ。

Bullying Problems and Teachers — Sociological Analysis of Bullying Problems (Ⅱ) —

Masaharu HATA

This article argues the relation between children's bullying (ijime) problems and teachers through the following procedure. First, I give light on the guidance and counterpanes of teachers in regard to bullying problems. Secondly, I examine how teachers' speech and behavior influence children's bullying.

These examinations show following results.

- 1, Many teachers mainly deal with both of "bullies (ijimekko)" and "bullied children (ijimerarekko)" when bullying problems occur.
- 2, The rate teacher groups cope with bullying problems in cooperation is not so high. Also, the rate of dependence on external institutions of bullying problems is low as.
- 3, In regard to daily guidance in bullying problems, relatively many teachers bring this into operation.
- 4, A considerable number of teachers indicate that teachers' speech and behavior relate bullying among children.
- 5, Not only the facts of bullying, many children don't consult with their teachers about various things very often. This comes from the circumstance as distrust children throw their teachers.
- 6, Teachers' negative attitudes toward children (partiality, to wreak teachers' anger without reason upon children, and so on) give children considerable unpleasant feelings. In addition to this, the more the teacher take such attitude, the more bullying the class has among children.
- 7, There are explicit bullying acts among teachers in considerable rate, as well. The teachers who say being bullied by other teachers count 44.4% in elementary school teachers, and 40.1% in junior high school teachers.
- 8, The children who perceive bullying among teachers are never few. Furthermore, it is shown that the more the schools have bullying among teachers, the more bullying among children.